# おこない

それは鯖江市東部に古くから伝わる厄払いの習わし。厄年の男衆らがもちをまき、町民はもちを拾い、食し、一年の無病息災を祈ります。各集落では今年もまた盛大に開催され、『おこない』の歴史にまた一つ年輪を刻んでいます。

## 全国的に珍しい行事

結婚や還暦などの祝い事の際、また豊作を祈願するためにもちをまく風習は全国的に数多く存在します。しかし、厄払いの神事の一つとしてもちをまくこの『おこない』は、全国でも珍しく、鯖江市東部の集落では毎年正月過ぎのこの時期に行われ、大きな賑わいを見せます。

## 河和田、北中山地区に伝わる

鯖江市は東西に広がる形をしていますが、面積は84・75㎢とコンパクトなまち。その中でもこの『おこない』が伝わり、今もなお行われているのは、河和田、北中山の2つの地区のみ。両地区では、その年に厄年を迎える人が不在のため、中止となることもありますが、通常は全て（2地区合わせて19町内22神社）の集落で行われています。

## 集落で異なる特色

一言で『おこない』といっても集落によって、日時やもち米の量、集め方、もちつきの方法はさまざまです。また、厄払いの神事とされていますが、その年に厄年（男性の場合）を迎える二十五歳、四十二歳、六十一歳の人全てがまく集落もあれば、特定の厄年の人だけがまく集落もあって、それぞれの集落では古くからの決め事を代々受け継いでいます。

## もちをまくのは男性のみ

各集落でそれぞれ特色はあるものの、『おこない』でもちをまくことができるのは男性のみと決まっています。『おこない』の日、厄年の男たちは、各集落にある神社の境内に設置された桟敷（さじき）に登り、集まった人に向かってもちをまきます。今ではモーニングやスーツ姿が主流になりましたが、昭和40年ごろまでは、もちをまく人は皆、紋付はかまのいでたちであったといわれることから、『おこない』は集落で行われる行事の中でも特に重要なものであったことが推測されます。

## 『おこない』は、いつから

そもそもなぜ『おこない』といわれ、いつ頃から始まったのでしょうか。現存する文献は少なく、残された文献にも詳細を解明する記述がないため明らかではありません。昭和48年に発行された「鯖江市史（民俗編）」には、『江戸時代にはすでに行われていた』という記述があることから相当古くから存在していたことに間違いありません。また、尾花町にある殿上山の禅定神社で行われる『殿上まいり』（下記参照）は、「織田信長が攻めてきた折に殺害された僧侶の霊を弔ったのが始まり」という言い伝えがあることから、約四百年以上の歴史があるとされています。

## ルーツは『越前漆器』にあり？

文献があまり残されていないこの『おこない』ですが、河和田地区片山町の歴史を記した片山町誌（昭和53年発行）に興味深い記述があります。「片山のおこないは、越前漆器発祥の地を実証するに足る行事である」と始まる文中には、「村の木地師が一人前になると椀の祖神を祭る筒井八幡宮（滋賀県）に参拝し烏帽子着の儀式を挙げる。その喜びを村人と分かつため、神田で収穫された米でもちをつき、お祝いしたのがおこないの始まり」と記されています。それが起源となったのであれば、千五百年の歴史を有する漆器産地である河和田や北中山地区に限って現在まで伝承されていることもうなずけます。

## 存続の危機を乗り越えて

この『おこない』も戦時中における食糧事情の悪化に伴い、米が配給制になったことで、一時中断する集落もありました。しかし、当時の村人たちは『できる限り経済的負担をかけず、また誰でもが参加できるように』と米の量を改めるなど時代に合った手法を模索し、現在まで脈々と受け継がれてきました。

## 『伝統は地域の宝』これからもずっと

数百年前と比較すると想像を絶するくらいに人々のライフスタイルや物事の考え方は変化しました。それでもなお、途絶えることなく長い時間をかけて築き上げられてきた伝統は、地域の、そして鯖江の宝にほかなりません。これからもずっと大切にしていきたいですね。

## 『おこない』とともに各地で開催される伝統行事を紹介します

### 『お面様で親しまれ』
### 追儺面（ついなめん）公開（川島町加多志波（かたしば）神社）
**2月11日（月・祝）**

毎年２月11日に川島町の加多志波神社で行われる『おこない』に合わせて、観音堂を開き国指定重要文化財の木造追儺面が公開されます。鎌倉時代後期に当時の最高技術を駆使して作られた傑作で、『父鬼・母鬼・子鬼』３面からなる追儺面を参拝できるのは１年でこの日だけ。参拝者は家内安全や無病息災を祈ります。地元では通称『お面様』として親しまれています。

### 『放り投げて厄を払う奇祭』
### 殿上（でんじょう）まいり（尾花町禅定（ぜんじょう）神社）
**2月3日（日）【2月の第1日曜】**

市の無形民俗文化財に指定されている『殿上まいり』。当日の朝、町民らは集落を出発し、殿上山の中腹にある禅定神社まで５kmの雪道を２時間かけて歩いて登ります。神社ではお神酒が振る舞われた後、厄年の人たちが威勢のいい掛け声とともに斜面に次々と放り投げられます。その姿から奇祭ともいわれるこの『殿上まいり』は、約400年途絶えることなく続けられています。